

景観フォーラム

巻頭言

「新型コロナウイルスの暴走が止まりません。……さて、このような伝染病に打ち勝つにはどうしたらいいでしょうか。外出しないこと。他人との接触を徹底的に避けること。このポイントを守れば、何とかなるのではないのでしょうか？従いまして、残念ながら、この2、3か月は当団体の活動は休息せざるを得ません。5月6月ごろになれば皆さんの元気な顔を拝顔できますことを期待して、徹底的に長めの読書に専念したいと思います。」と書きましたのは3月下旬であったと思います。しかし、3か月以上後の7月上旬になった今、コロナはいまだ収束する兆しは見え、またまた盛り返しがやって来ているようです。

このコロナウィルス禍が蔓延し始めた頃、政治家らが“ウィルスとの戦い”との表現をしたかと思いますが、この戦いが長引きますと、今度はウィルスとともに生きるとして“With コロナ”というキャッチフレーズを流し、そして飛沫感染を防ぐ手段として“ソーシャルディスタンスSocial distance”とかという人と人との付き合いに一定の距離を取るとして、政治家らは美辞麗句ともいえるスローガンを連発することで、何とか自らの責任をうまく逃れようとしている姿が、実に醜く表れているようでした。

「景観から考えるまちづくり」を標榜してきた我々にとって、人と人とのつながりを断ち切るようなことだけは避けなければなりません。そして「良き景観があるところ良きコミュニティが存在し、良きコミュニティは良き景観を創造する」と標榜するわれら団体にとって、今回のコロナ禍は新たな挑戦ではないかと考えます。景観を人類文明の根底から考察するとき、人類は当然ウィルスとともに生きてきたわけですが、“いつでも、どこでも、だれにでも、素早く低コストで”というグローバリゼーション社会の浸透がもたらした結果がこの“新型コロナウイルス禍”であるとするなら、長期にわたり景観創造をしてきた我々人類とは何かを、もう一度問い直すことが必要かもしれませぬ。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2020年度年間スケジュール>

*2020年度とは2020年4月1日⇒2021年3月31日のことです。

2020年

- 4月24日（金）第1回理事会・総会 於JICA研究所⇒延期
- 5月21日（木）**第1回景観研究会**（東京の景観）於JICA研究所⇒延期
- 6月28日（日）**第1回景観まちあるき**（東京都内：？）⇒延期
- 7月21日（火）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 7月22日（水）**第2回景観研究会**（東京の景観まちづくり） 於JICA研究所⇒延期
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？
- 9月25日（金）**第3回景観研究会**（東京・？の景観）於JICA研究所
- 10月18日（日）**第2回景観まちあるき**（東京・？）
- 11月20日（金）第2回理事会・**第4回景観研究会** 於JICA研究所
- 12月17日（木）忘年会（？の居酒屋）

2021年

- 1月21日（木）**第3回景観まちあるき**（？）
- 2月18日（木）**第5回景観研究会**（丸の内）於JICA研究所
- 3月28日（日）**第4回景観まちあるき**（未定）

■以上のスケジュールは、提案ですのでこれから決定版を議論できればと思います。

コロナ禍の生活雑感

石見 茂夫

中国武漢から遠くの出来事のように伝わって来た「新型コロナ」が身近な所にやって来てしまいました。遠いよその国の出来事と高をくくっていましたが、思わぬ速さで影響が出始めました。最初に直接の変化を感じたのは、1月下旬から2月上旬に掛けてスキーに訪れていた北海道富良野のホテルでの出来事でした。ある日突然ホテルのスタッフ全員がマスク姿に変わっていました。

薄々感じていましたが、新型コロナ対策で全スタッフのマスク着用が本社から義務付けられたとの事でした。宿泊客へはマスク着用の要請はありませんでした。

ホテルの宿泊客の8割位は外国人客で元々マスクを使用する習慣が無いのですが、スタッフが全員マスク姿になると皆が驚くほどホテル全体が異常な感じに成りました。

帰宅してから数日後に富良野町で新型コロナの集団感染のニュースを見て少々慌てましたが感染せずに幸運でした。

こんな出来事があり自粛生活も自然に納得できて、その後の予定のキャンセルを真剣に考えるように成りました。既に仕事は常勤勤務が無い体系に切り替えていましたので、自宅で電話とメールでの業務で充分に対応が出来ました。外出は必要最低限にしましたが、予定していた地方出張は先方から東京から来ないで下さいとの要請があり自粛したままになっています。それでも業務に支障が出ないのが幸いでした。

6月にはヨーロッパに出掛ける予定が有り、状況を注意深く観察しながらの生活に成りました。現地の大使館からは新型コロナの感染拡大が日毎に厳しくなり国境閉鎖が始まりつつあるとのメールが連日入りました。また航空会社からは予定便が間引き運行に成り欠航の可能性が高いとのメールが同じ頃に届きました。しばらく経由地変更等を考慮しながら状況を見ていましたが、仮に現地に行けても予定通りの行動が出来る見通しが立たずキャンセルすることを決めました。ホテルや交通機関を直接予約手配していましたが、キャンセルメールの対応に追われる事に成ってしまいました。

ちょうどその頃、一緒に仕事をしていたフィンランドの国営会社の社長から、兄が新型コロナで亡くなったとのメールが入りました。フィンランド航空のパイロットをしていた方で、3月にオーストリアにスキーに出掛けて感染したようです。帰国後に発症して治療を受けていたのですが回復できなかったようです。

医療設備が整ったフィンランドでも高齢者が感染すると重症化しているようです。

同じ頃にその友人夫婦はスペインのカナリア諸島に出掛けていたそうで、帰国後は2週間ヘルシンキの自宅で隔離になったようです。幸い感染はしなかったようで、今は人の少ないサマーコテージで生活をしています。今回はあらためてパソコンと通信手段の発達に感謝をしています。

自宅に居る時間が長くなり、懸案だったアルバムや写真の整理に取り掛かることにしました。整理を始めるとついつい写真に見入ってしまい効率がまったく上がりません。しばらく見る機会も無かったアルバムをゆっくり見るチャンスだと頭を切り替えて、効率を無視で少しずつスキャン作業を進めました。

それでも3ヶ月も経過すると概ね整理作業の完了が見えて来ました。

今回の新型コロナはまだまだ収束の目途がまったく立っていませんが、ワクチンや特效薬が開発されるまでのこれから数年間は感染の警戒が必要でしょう。オリンピックを開催するどころの話では無いでしょう。失うものが有れば得るものが有ると前向きに考え、これからの生活の方法を考えることが必要でしょう。

今まで70年の人生で初めて、過去に経験した常識が通用しなくなる時代に戸惑いながらも生き方を模索しています。感染に気をつけて生活しましょう。

昭和万歳！

豊村 泰彦

生きるということ

30数年前には「生きることは死に抵抗することである」などと考えていた。まだ、目の前に目標があり、それに向かって行動していた時期であり、現実と戦っていた時代でもあるからだ。チャレンジし続ける限りは、生きていなくてはならない。死は戦いの終結である。生きることをやめれば現実の苦しさからは解放される。そして今、「まだ生きている」という時期を迎えた。やはり、今も静かなチャレンジをしている。

アレルギー族

アレルギーは肉体の過剰反応だという。花粉症もその一つ。アレルギーは、体内の様々な部分で反乱を起こす。目、鼻、喉、気管、皮膚などは主な部分。現代人にアレルギーを持たない人はいない。

アレルギーを起こす要因として、個人個人の体質があるが、外部からの刺激が発端となる。したがって、アレルギー体質の者は自分と接触するものは自然界のものであれ人工物であれ過剰反応し、防衛しようとする。その過剰反応が社会的行動にも影響し、積極性よりも慎重さを重視するようになる。アレルギー体質は常に周囲の環境に気を配り、危険を予知しながら現実社会を生き抜いていかなければならない。しかし、だからこそしぶとく生き延びることができると思っている。

テレワーク

昭和の時代、かつて私もサラリーマンをしていたころ、ホーム（家庭）は家族が生活をする場だった。父親はお金を稼ぎに会社や仕事場に行き、子供は学校に金を稼ぐようになるために学校に通う。家庭を守る主婦はホームを守るため家事を行うとともに、巨大な人間大砲を使ってご主人を会社に打ち込む。そういうイメージだった。

しかし、新型コロナの蔓延によって、父親がホームに帰ってきた。そして、会社に行かずにホームに閉じこもって仕事を始めた。母親と子供はホームは肉体の一部であったが、父親にとってもホームは肉体の一部となった。

30年くらい前、会社と実質的に仕事する場を切り離す「サテライトオフィス」というものが一部で始まり、日本もそういうビジネススタイルが早く一般化すると思っていたが、コロナのおかげで今年一気に広まった。これからはテレワークの時代だろう。



松本にて

コロナ禍体験雑感・・・

野田 路人

2020年スタートの正月をのんびり過ごし、今年もまた一年平穩に過ごすことを祈願した初詣からあっという間の6か月。確かに昨年末、中国で新型コロナウイルス発生はニュースで知っていましたが、今までも見聞きした「SERS」、「MARS」位の認識で、あくまでも対岸の火事。「鳥インフルエンザ」、「今年は何型インフルエンザ流行」でさえ今まで身をもって危険を感じることは有りませんでした。

2月初めの頃、マスクが買いにくいとのニュースは有りましたが、多少お店を回れば品物はあり、一応エチケットとしてマスク持参で気の合う仲間と宿泊旅行をエンジョイしましたが・・・なんとその10日後位から街からマスクが消え、販売していたどの棚を見ても「売り切れ」「入荷未定」のオンパレードとなってしまいました。横浜港に2月3日に寄港したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の集団感染で最終的にのべ4000人超を検査し、3月3日までに延べ706人の感染確認をニュースで知るに至り、これは大変な事態とやっと認識した次第です。

マスコミ各紙も連日紙面のほとんどは「コロナ」の文字で埋まる中、特別措置法に基づく「緊急事態宣言」が4月7日に出され、5月14日の解除以降も自粛生活は続き、この騒ぎがいつまで続き、この先なにが起こるのか？ まだまだ先が見えないと感じております。

今回の「コロナ禍」は第二次世界大戦以降最大の全世界的な負の体験、安倍晋三首相が新型コロナウイルスの感染拡大を「第三次世界大戦」と認識しているという報道が出ましたが・・・自粛生活で時間のある中、多くのニュース情報を見聞きすると、今まで殆ど意識し無かった事でいくつか感じたことがあります。

一つ目は、「日本のデジタル化はかなり遅れていること」・・・中国をはじめ台湾、韓国など多くの国が人々の位置情報を把握できるシステム屈指可能のデジタル環境を構築している中、保健所から東京都に感染者の集計を送る手段が“ファクス”で報告漏れがあったとか、特別定額給付金（10万円）をマンナンバーによるオンライン申請しても、事務処理出来ない市町村が発生し、結局は郵送での対応を余儀なくされ、今まで我が国はIT技術の先進国と思っていましたが、想像を超える程スピード感に欠け、デジタル化の後進国にある日本の現状に只々驚きを強く感じました。

二つ目は、「緊急時の各国の国民性とリーダーシップの違い」・・・多くの政府が最初は否認し、対応に手間取り、あげくにドイツをはじめ欧州等の国々は「ロックダウン」を繰り返すなかで、台湾はSERSの経験から早期に厳格な渡航制限措置を取り、マスクの製造能力を高めて国内向け製品を確保し、コロナ対策責任者や医療専門家が毎日ブリーフィングをするなど、情報公開を徹底し、迅速果敢な政策で早期封じ込め対策を早期に着実に取り、成功に導いています。

日本のコロナ対策が何となくうまくいったのは、第1波を日本の科学の力で抑え、専門家が中心となって行ったクラスター対策とその後の「人々の接触8割減」というアイデアで、ある程度は達成できたのではと思いますし、京都大学の山中教授が成功の「ファクターX」の候補として挙げた、(1)クラスター対策(2)2月後半からの大規模イベント休止、休校要請による危機感の共有(3)マスク着用など高い衛生意識(4)ハグや握手、大声での会話などが少ない生活文化(5)日本人の遺伝的要因(6)BCG接種など公衆衛生政策の影響(7)今年1月までのウイルス感染の影響(8)ウイルスの遺伝子の影響、の8項目も有る様に思います。

いずれにせよ、政府の対応は後手に回り、行政も、一部を除いて、あまり機能しなかった中、安倍首相のリーダーシップのなさが露呈し、地方自治体の首長の差もよく見えたと思うのは私だけでしょうか。

三つ目は、「世界経済の動きと連動しない株価の不思議さ」・・・コロナ禍による影響で観光、物販、飲食サービス業など軒並み売上げが壊滅状態で、各種企業の赤字・倒産・廃業などニュースが増えだす中、日経平均4/9

は今年1月20日24,000円越えが3月19日に16,000円台に急落、今までの経験ではこの時点で、いよいよ「オイルショック」「リーマンショック」を超える大不況到来かと思う中、この6月には22,500円あたりで上下動、アメリカ、中国の経済環境も下降気味で、まだこの先どの様に展開になるか判りませんが、出来れば「株価大暴落・未曾有の大不況時代」などの言葉が出ないことを切に望みます。

四つ目は「湧き出す新しい言葉の数々とカタカナ文字の多さ」・・・日本語では「三密」「緊急事態宣言」「咳エチケット」「新しい生活様式」など今まで聞き慣れない言葉が常用化し、「ロックダウン」「アベノマスク」「フェイスシールド」「パンデミック」「テレワーク」「リモートワーク」「ステイホーム」「オーバーシュート」「コロナショック」「クラスター」「ソーシャルディスタンス」「ネックゲイター」「ウィズコロナ」「アフターコロナ」「ポストコロナ」「Go TO キャンペーン」等々の聞き慣れないカタカナ文字が連日飛び交い、最初は理解に苦しみましたが、最近では聞き慣れ、「感染者の集団」と聞くより「クラスター」の方が直感的になり、英語の使い方が違うかも知れませんが、意味が伝わればそれでよいのかもしれませんが。今後は広辞苑にも載り、今年の流行語大賞は？などとか考えてしまいます。

五つ目は「2020年は世界の変革期か？」・・・2020年、突然世界を襲った新型コロナウイルス。コロナ危機対応に世界が追われ、第2波に備える現状で、貿易・ウイルス対策・5G・香港情勢などで米中衝突は激化する中、アメリカ大統領選挙が行われ、トランプ再選はあるのか？トランプ和平案で悪化するパレスチナ問題や北朝鮮の不穏な動きに加え、先進国にも広がる中国の「一帯一路」や南シナ海や尖閣諸島への動きなど、このコロナ禍に乗じているのでは？と思えることが次から次と出てきます。二極化が増々深刻化する世界、イギリスEU離脱による欧州の分断も懸念され、グローバル時代の世界の体制も大きな変革期ではと思われまます。

日本も問題山積みで、最近の安倍総理のリーダーシップに黄色信号を覚え、「ポスト安倍」のニュースを見ると来年を待たず、リーダー交代の可能性も現実化するかも知れません。

コロナ禍に伴う「テレワーク」「リモートワーク」により急激な勢いで働き方改革が進み、職場の有り方、仕事の進め方など、今までとはかなり変わると思われ、時間の経過とともにあの時点で大きく変わったと明確に認知されるのではと思います。

六つ目は「人間の対応力のすごさ」・・・中国武漢の人海戦術による短期間の大病院建設には驚かされました。多少時間は掛かりそうですが、日本国内でのワクチンの独自開発や今までの技術を応用した検査器具の製作など医療関係の対応はかなりすごいと感じます。又、今までの営業業態を変えた新しいビジネスモデルづくりを進め、新しい商品開発が多業種で進める様子が伝えられています。今まで目にしたことが無かった「フェイスシールド」を素人が3Dプリンターで作る人もいる事や、すでに「アフターコロナ」が論じられるニュースを見ると、人間の対応力を強く感じる次第です。

七つ目は「自然の力、人間との共生を痛感」・・・今回の「コロナ禍」で100年前にスペイン風邪で世界中で5億人が感染し、死者数は1,700万人から1億人に達した可能性が有ることを初めて知りました。今回世界で1000万人近くの感染者を出し、死者も40万人を超えその数は毎日増加しています。この目に見えないウイルスとの戦いは、いつ収束するか知れず、自然の力は膨大であり、人間が完璧にコントロールすることは難しく、自然の中にいる人間はいかに自然と共生するかを痛感しております。

自宅での自粛生活はたっぷりと時間があり、今まで先延ばししていた片付けや、手直しなどで過ごす中、本棚の中から、47年前に提出した「景観」をテーマとした卒論の原稿のファイルが出てきました。勿論ワープロは無く、原稿はトレーシングペーパー状のマス目用紙に手書きし、青焼きコピーを提出したものです。もう何年も前から紛失したと諦めていた物ですが、今回、製本して内容を読み直すと、稚拙な表現の個所は多々ありますが、「景観」に対する考えがその時とあまり変わらず、進歩が無いのか？それともその時点でまとめたことが現在の自分の一部になっているのかとあれこれ考え、自分にとって楽しい時間が持てたことはラッキーでした。

新会員になって

丹羽 譲治

織物の町といわれた桐生で生まれ、大学で建築を学びました。卒業後、工業デザイン事務所に入所し、最後の仕事が、つくば万博'85の会場全体のストリートファニチュアデザインでした。12年勤め、独立直後に信楽シンボルモニュメントコンペティションの最優秀案に選定され、年末に竣工しました。良いスタートが切れました。デザイン事務所での実績とコンペ当選のおかげで大きなサイン計画が舞込むようになりました。2012年から建築学科の、2016年からは大学の同窓会での仕事が増え、自分の仕事を凌駕して現在に至っています。今年の7月に70歳を迎えます。任期が切れる来年は、同窓会の役職をやめ、自分の時間を増やしたいと思います。幸い昨年12月に応募したARTSHODOFESTA2020に入賞し、展示会が7月に三鷹で開催されます。応募作でなくA1サイズの新作を4点出品します。展示会での評価に関係なく、趣味として継続したいと思います。当初4月でしたが新型コロナ禍で延期されました。感染者が一千万人に迫ろうとしていて生活、仕事に多大な悪影響を及ぼしています。新型コロナ禍を機にダンボール箱や高く積上げられた雑誌、本と書類の整理が出来たこととや考える時間が増えたことを良しとし、ポジティブに考えたいと思っています。

桐生の街の東側に機織り工場多くがりましたが、自宅の近くに1件だけ鋸屋根の工場がありました。工場前の路地が遊び場でした。鋸屋根とリズムカルな機織の音が好きでした。景観の記憶には音を伴うと思います。小学校高学年頃には工場も無くなり、住宅地となり路地も無くなりました。

2月の見学会「大丸有」は、野田さんの解説でおこなわれました。久しぶりの大手町に驚き、ただ高いビルを見上げるばかりで1週間程首を痛めました。建物の足回りに緑が少ないと感じました。憩える場所がない。リーマンショック直前に行ったニューヨークを思い出しました。1967年に開園したロバート・ザイオン設計のビルの谷間のパレイパーク。幅12メートル、奥行30メートルの豊かな空間であるこの公園は、ニューヨーク市公園協会の展覧会に端を発し、冊子による啓蒙とウィリアム・パレイ財団の計らいにより4年を経て実現しました。街並みとしての景観を期待できない現在であるから一層ポケットパークは有効な手段になりうると思います。

金沢は、食も美味しく街のスケールが適切で、何度となく訪れています。特に主計町茶屋街と長町武家屋敷跡界隈が好きです。ひがし茶屋街は、街灯にガスを使うなど演出を凝らしていますが、作られ過ぎている印象を受けます。川一つ隔てた主計町茶屋街は、一つ路地に入ると家がせめぎ合っていて自然に形成された面白い空間になっています。長町武家屋敷跡界隈は、塀特に冬支度の塀が良いです。維持費を市が負担していると聞きます。言い古されていますが、良い景観を維持あるいは生み出すには、民と官の共同、協力が必要だと思います。



信楽シンボルモニュメント「出発」



ニューヨーク市 パレイパーク



金沢市 主計町茶屋街



金沢市 長町武家屋敷跡界隈

<LFJブックレビュー 67>

『コロナの時代の僕ら』 パオロ・ジョルダノー著 飯田亮介訳

2020年4月刊 早川書房

本年2020年7月6日現在、新型コロナウイルスの猛威は収まらず、世界全体の感染者数は1,128万人、死者数は53万人以上となっている。USAの283万人（死者13万人弱）を筆頭に先進国、発展途上国問わず、すべての国々にこのウィルスは蔓延している。いまだにワクチンは開発されておらず、100年前のスペイン風邪（感染者数5億人、死者数1,700万~5,000万人）の経験からすると、この状況は2年から3年以上の忍耐を必要とするかもしれない。

この砂をかむような日々を過ごさざるを得ない中で、イタリアの若手小説家が素早くエッセイにしてこの3月に発刊した。1882年トリノ生まれで、トリノ大学で素粒子物理学の博士課程を修了するという異色の小説家である。デビュー作『素数たちの孤独』（2008年）では200万部を売るベストセラーを記録し映画化もされ、2012年には『兵士たちの肉体』（2012年）が翻訳されている。

このエッセイは27編からなる取り留めのない日常生活から「今回の新型ウィルス流行は、この世界が今やどれほどグローバル化され、相互につながり、からみ合っているかを示すものさしなのだ。」という指摘にもあり、日常から見たグローバル現象をエッセイという形で諸々の角度から観察している。そして「ウィルスは、細菌に菌類、原生動物と並び、環境破壊が生んだ多くの難民の一部だ」と指摘することを忘れない。そして、「自己中心的な世界観を少しでも脇に置くことができれば、新しい微生物が人間を探すのではなく、僕らの方が彼らを巣から引っ張り出しているのが解かるはずだ」と。即ち、地球は人類だけの共同体のみではないことを知るべきだ。

感染症の流行とともに諸々の迷走が生じる。「行政は専門家を信頼するが、僕ら市民を信じようとはしない。市民はすぐに興奮するとして、不信感を持っているからだ。専門家にしても市民をろくに信用していないため、いつもあまりに単純な説明しかせず、それが今度は僕らの不信を呼ぶ。」その結果、市民は右往左往せざる得なくなる。そして著者は一つの覚悟といえるべき言葉を発する。「日常は一時中止され、いつまでこの状態が続くのかは誰にもわからない。今は非常時の時間だ。この時間の中で生きることを僕らは学ぶべきであり、死への恐怖以外にも、この時間を受け入れるための理由をもっと見つけるべきだ。」と。

そして復興が始まるとしよう。「支配者階級は肩を抱き合って、互いの見事な対応ぶり、真面目な働きぶり、犠牲的行動を褒め讃えるだろう。自分が批判的になりそうな危機が訪れると、権力者という輩はにわかに団結し、チームワークに目覚めるものだ。一方、僕らはきっとぼんやりしてしまって、とにかく一切をなかったことにしたがるに違いない。到来するのは闇夜のようでもあり、また忘却の始まりである。」という著者のうがった皮肉には耳を傾ける必要がある。

このコロナという現象は、単なる感染症の蔓延という現象面だけに目を向けるだけではなく、現代文明への根源的問いかけが必要ではないだろうか。

「現代文明の進行方向はこれでよいのか？ほかに選択肢はないのだろうか？人類は地球における単なる侵略者であるのか？」と。（斉藤全彦）



天地玄黄 NO.24 「さいたまの観光③」

大宮盆栽村



大宮盆栽村とは、東武アーバンパークライン(野田線)とJR宇都宮線に囲まれた大宮公園北側一帯の総称です。我が国屈指の盆栽郷として知られ、四季折々の樹影は訪れるひとの心を楽しませてくれます。また毎年5月3日～5日には「大盆栽まつり」が開催され、全国から訪れる多くの盆栽愛好家で賑わいます。

<自然美の凝縮 盆栽>

盆栽は、時間・空間と山水の景を表現し自然にある姿以上の美しさを求めていく日本の伝統的な芸術であります。そこには、四季の移り変わりに対する豊かな感性と生命に対する心の優しさや美的感覚が凝縮されています。長い歴史を育んできた盆栽は海外でも高い評価を受け、現在では日本の文化としてBONSAIという国際語に定着しました。大宮の盆栽村は、世界の盆栽の中心地として海外からも多くの愛好家が訪れています。

<盆栽村の歴史>

大宮に盆栽村が誕生したのは、大正14年とされております。当時、市内旧土呂町の一部、草深い武蔵野の山林地帯であったここに数軒の盆栽業者が、東京から移り住み盆栽の育成にいそしみ、土地の愛好者を刺激し、次第に盆栽を業とする者が増加し盆栽村を形成していきました。盆栽村を開拓した先人達の先見性から、現在の道路幅も当時造られたそのまま、ほぼ碁盤の目状に造られ、道の両側にはさくら、もみじ、かえで、けやきなどの木々が植えられています。それらの道は「けやき通り」「もみじ通り」など植えられた木の名前が付いており、盆栽四季の道と呼ばれています。

また、戦前は30数軒の業者を数え、業者だけでなく盆栽村に住む人たちも多かれ少なかれ盆栽を持って（当時の盆栽村の内規による）親しまれたようです。昭和15年に旧大宮市に編入されたからは、世界にも例の少ない行政上の『盆栽町』と言う町名に生まれ変わりました。

現在、盆栽町には5軒の盆栽園があり、それぞれ特色ある盆栽を手掛け、四季折々の樹影は見る人の心を楽しませてくれます。

<盆栽町周辺の盆栽園>

盆栽園名	住所・電話
芙蓉園 Fuyo-en	さいたま市北区盆栽町96 TEL.048-666-2400
九霞園 Kyuka-en	さいたま市北区盆栽町131 TEL.048-663-0423
清香園 Seikou-en	さいたま市北区盆栽町268 TEL.048-663-3931
蔓青園 Mansei-en	さいたま市北区盆栽町285 TEL.048-871-9255
藤樹園 Tojyu-en	さいたま市北区盆栽町247 TEL.048-663-3899
松雪園 Shosetsu-en	さいたま市北区東大成町2-640 TEL.048-664-5332

<アクセス>

さいたま市北区盆栽町

東武アーバンパークライン(野田線)「大宮公園駅」より徒歩5分



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <https://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan